

## 人種・民族差別・偏見と態度研究 (Ⅱ)

### —日本の人種・民族差別・偏見と態度研究—

坂 西 友 秀 埼玉大学教育学部心理・教育実践学講座

キーワード：人種・民族・奴隷・奴隷解放・公民権運動・アパルトヘイト

#### 1 日本の「人種」・「民族」差別・偏見と植民地

その人に固有の名前の剥奪といえば、日本が韓国を植民地化したときに行った「創始改名」がすぐに思い浮かぶであろう。「創始改名」は、奴隷貿易で「黒人」の人としての名前がヨーロッパ人によって放棄され、機械的に物品同様に品番のごとくに命名し直されたのとは大きく異なっていた。しかし、日本に征服・支配された朝鮮の人々にとって、日本式の氏を朝鮮の万民に強制することは、先祖伝来の一族の系譜・族譜が失われ、自らの存在・アイデンティティの基盤を奪われることを意味し、底知れぬ脅威となった。この点で、「創始改名」は、奴隷貿易で「黒人奴隷」が固有の名前を剥奪されたことと本質的には共通した性質をもつものであったといえよう。以下では、宮田・金・梁（1992）によって、「創始改名」の実態と、朝鮮の人々・民族にとって持つその重く苦々しい意味を概略理解することにしよう。創始改名の心理・歴史的な意味を理解することは、「黒人」差別や偏見が決して私たち日本人に無縁なものではなく、人種・民族差別・偏見の問題が、自らの歴史に刻み込まれた当事者問題であることを私たち自身に突きつけることになる。

(1) 韓国併合と「創始改名」 日本が韓国を併合したのは、1910年8月29日である。「1940年2月11日から実施された創氏改名」は、日本の朝鮮支配政策の中でも、もっとも朝鮮人に苦痛を与えたものの一つであった（宮田・金・梁, 1992）。朝鮮人の名前を日本式に整えるため、日本の家号である氏を作らせ（創氏）、韓国名を日本式の名前に改めさせた（改名）。これが、「創氏改名」である。「『創氏』とは氏（家の称号）を創ることで、朝鮮では日本と違い、『姓』（姓とは男系の血統を表わす）は不変で、女性が結婚しても『姓』は変わらない。したがって夫婦は別姓であり、子は父の『姓』に従うから、母と子も別姓となる。そこで朝鮮では一家数姓が普通ということになる。それを日本の家族制度に習い、家の称号である氏を創らせようとしたのが『創氏』である」（宮田・金・梁, 1992）。

#### 朝鮮の同族(宗)の識別符号

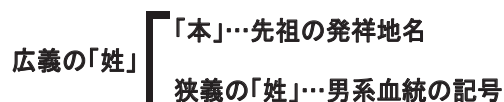


図1 朝鮮の「本（本貫）」と姓の仕組み（宮田・金・梁, 1992より）

「創氏」によってそれまで朝鮮の人々が持っていた「姓」や「本（本貫）」が失われたわけではなかった。朝鮮の親族集団は、宗と呼ばれる先祖祭祀を中心とした男系血族集団である。この男系血族集団を識別する指標が2つある。一つが姓であり、男系血縁系統を表す。他の一つが「本（本

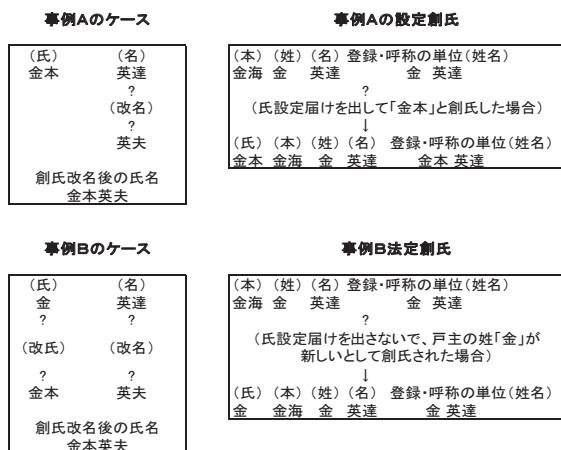


図2 日本人と朝鮮人の名前の構造（宮田・金・梁，1992より）

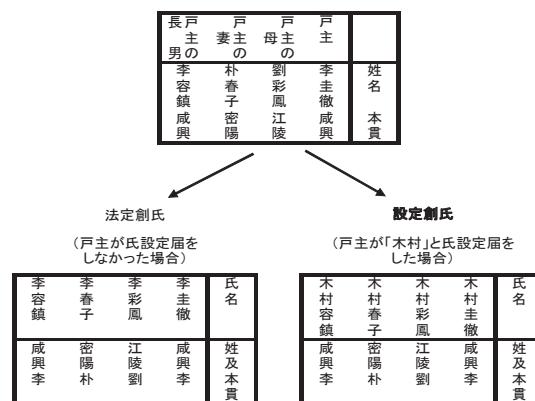


図3 戸主が氏設定届をした場合としなかった場合（宮田・金・梁，1992より）

貫・貫籍）であり、一族の先祖の発祥の地名を表示する（図1）。

朝鮮人の場合、姓と名前（例えば、李圭徹）が日本の姓名にあたりと考えられる。この姓名の上に「本貫」がついている。姓は結婚しても日本のように「婚家」の姓に変わるわけではないので、同じ家族であっても「李圭徹」「劉彩鳳」のように、「李」と「劉」で異なる。図2に例示されるように、「創氏」をすると、いままであった「本貫」「姓」「名」に日本式の氏が新たに付け加えられることになる。「本貫」が金海、「姓」が金、名が英達の場合、新しく氏として「金本」を「創氏」すると、「金本 金海 金 英達」となる。登録される名前は「姓」と「名」の部分であるから、「金英達」である。さらに、名前を変える「改名」をすると、例えば、「英達」を「英夫」に改名すると、創始改名した登録姓名は「金本英夫」になる。なお、氏を新しく創り登録することを「氏設定届」「創氏届」といい、創氏後も「正当な理由がある場合」氏を変え、名前を変えることができた（創氏改氏改名、図3）。

戸主は、決められた期日（制令6ヶ月以内、1940年2月11日～8月10日）までに「氏設定届」（設定創氏）をしなければならなかった。戸主が届け出ない場合、罰則はないが2月11日時点の戸主の姓が8月11日（届け出で期限の翌日）をもってその家の氏と見なされた。創氏改名の歴史的法的分析及びその規制と経過については金（2002）、金（1997）が詳しく分析を行っている。

(2)「半島の子ら」の創始改名 物語では、日本語を全く知らない朝鮮半島の子どもに、小学校教育を通して「國語」を身につけさせていった峰先生と子どもたちの交流を描いている（飯田，1942）。疑うことを知らない子どもたちは、「恩師」峯先生の教えに忠実に従い、期待に添うよう必死の思いだった。韓国語の使用は禁じられ、日本語が子どもたちの「國語」にされたのである。けなげな子どもたちは、母語の韓国語が思わず口をついて出るたびに、罪悪感を感じ、峯先生への贖罪の気持で一杯になるのであった。「—あ・な・た・の・な・ま・え・は…先生が何かおっしゃってゐる。…秀永は何か珍しいものを発見したやうに瞳を一心に先生の口許に注いだ。だが先生の発音がどんなに巧みでその上はつきりしてゐても、子供たちにはそれに對して意味の構成など思ひも依らないことだ。一應努力して見る。でもそれが無駄な努力であることが分ると秀永は心もち顔を紅らめて狼狽を押し隠すやうに、當惑した笑ひを顔中で峯先生に投げかけた」（飯田，1942，p.3）。峯先生は、秀永の名前を日本語読みで教えているのである。左胸につけている名札を峯先生の人差し指が指したとき、秀永は思った。「何だい、名前(いるうむ)のことか…ふゝ。名前なら、

よく知ってらア…。そしていきなり大声で「すよむ」と叫んだ。「…頷いたやうに見えた峯先生の顔は實は左右に強く振られて明らかに否定してゐるのだ」。金秀永は、ようやく気がついた。「…きんしゅうえいくん、あ、日本語(いるぼんまる)だった。日本語、日本語。…きんしゅうえいくん。もう一度小さく口の中で繰り返して、ふゝゝゝッ。すよむがしゅうえい。これは大變な發見だ」。一年生入学の二日目の朝の授業風景である。一月も経つと「峯先生の國語は、すっかり子供達の耳を國語化して仕舞ってゐる」。母語を剥奪し、占領国のことばを強要することは、その国の文化を根こそぎ破壊する行為である。子どもが、感じ、考える感性と思考を生み発達させる基盤である言語を失うことは、民族の歴史と文化を抹消され、自己のアイデンティティを喪失することにも等しい。南アフリカのアパルトヘイト政策で、現地住民のバンツ語が、アフリカーンスや英語にとって代えられたことと同じことが日本の植民地で行われてきた。

「國語」としての日本語教育は徹底したものであった。子どもたちの間でけんかが起こったとき、一人の子が朝鮮語を叫んだ。非難が集中した。それも子どもたちからの批判だった。その子が「とっけび、とっけび」と朝鮮語を口にしたらだ。「奥に潜む激しい感情を叩きつけるやうに『朝鮮語やめ、朝鮮語使ふな。』と叫んだ。…『朝鮮語、だれ、朝鮮語、使った…』、『使った、使った、とっけびって』、…『とっけび、いゝじゃないか。』…『いかんよ、いかんよ、學校、朝鮮語いかんよ。』…『いゝよ、とっけび、いゝよ。』「だめ、だめ、朝鮮語だめだよ。』、『だめないよ、とっけび、いゝよ。』。教育の浸透がもつ恐ろしく強大な力を示す。「ひよいと口を衝いて出た朝鮮語の斷片(かけら)すら子供達の間では容赦されない事實に違ひないのだ。入学以來ものゝ半年も過ぎない子供たち。強力な國語意識が、朝鮮語使用に對して強力な罪惡感をさへ構成しようとしてゐる」のである(飯田, 1942, p.55)。子どもたちの赤裸々なやりとりは、「民族同化」に果たす國語教育の絶大な力と効果を表している。現在でも韓国を訪れると、時折年配の人が流暢な日本語で話しかけてくる。朝鮮教育令に基づく「日本人化」のための教育がいかに徹底して進められたかを示している。

物語では「創氏改名」も語られている。「今日。第一時間目の修身の時間は、子供たちを素晴らしい感激と興奮に巻き込んでしまった。半島の創氏制度の施行であつた。それを平易に囁みくदैて峯先生は子供たちに激しい氣魄を以て迫って行つた」(飯田, 1942, p.93)。当時の朝鮮半島における皇民化教育と創氏改名の趣旨を、子ども向けにわかりやすく説明している。この記述は、朝鮮半島において進められた教育の核心部分に関する私たちの理解を深める上で有用である。長くなるが、引用しておこう。『先生がいつも云つてゐる内鮮一體と云ふこと、一視同仁の有難い思召し、それが又々新しい形になってあらはれてきたのです。みんなが毎朝、毎日高らかに唱へてゐる皇國臣民の誓詞の第一、私共ハ大日本帝國ノ臣民デアリマス。といふ誇高い決心…一つ難しい言葉を教へてあげよう。僕たちは日本の子供だといふ決意…それにはまだゝゝ形の上でも一緒にならねば、いや内地の風俗や習慣に習ふといふことも大切なことなんだよ。…みんなが國語を使ふということは一日ゝゝよい日本人になって行くといふ事なのだ一言葉ばかりじゃいけない、もっともっと先刻云つた風俗や習慣も近寄つて、それによつて一層立派な日本人にならなければいけないのだ。中には全く同じものも随分ある譯だが、一番激しい違ひは、…君達の苗字や名前だよ』。朝鮮人の日本人との一体化の仕上げとして朝鮮名の日本式呼称への改変を子どもに説いているのだ。「り・ぐせんくん、きん・しゅうえいくん、なんて。これはまだ君たちの名前を國語の音で呼んでゐるだけだが朝鮮語で呼ぶと、それ、きん・しゅうえいくん が、くむ・すよん になるだらう。でん・せいれつくん など、ちょん・ちょんよる になるだらう。…ところがね、…先生の苗字は、さう々々みね、先生の名前は たけしつて讀むんだよ。…同じかな…さうだ、はつきり違ふという



ふ事が分かるだろう」。朝鮮「民族」を「皇国民」にするための総仕上げとして、日本式の氏と名前を新たに朝鮮の人々に「与えた」というのである。

(3)「家」制度への同化と創氏改名 日本の家制度に触れている。「内地では家といふものが大變重んじられて、それが持つ氏（うじ）…氏の名譽の為なら喜んで死ぬ…兵隊さんは、何時でも自分の譽れを懸けて、天皇陛下のお為に働いてゐる…。朝鮮には今まで氏といはれるやうなものがなかった譯だ。だからお父さんの姓とお母さんの姓はいつまでも違つてゐたし、これではいけない。お母さんがその家に來られたらお父さんと同じ苗字にならなくてはならない譯だ。昔から姓はあったのだが…家を中心としてのたゞ一つの氏といふものはなかったわけだね。それが今度…いゝかね、この度有難い思召して、いよ々々朝鮮の人にも氏を創ることが許されたのだ。簡単にいふと内地の人と全く同じ氏名を名乗ることが許されたのだ」（飯田、1942, p.98-99）。峯先生のことばに小躍りして喜ぶ子どもの姿が描かれている。「あつ、いゝぞ、いゝぞ、僕等の名前、内地の人と同じやうに。いゝなあ、七十五名は一齊に小鳥のやうに沸き上がった」。子どもたちは何の疑念もなく、「日本文化」を吸収ししつゝあった。

創氏改名を受け入れない祖父を説得してもらうために、秀永は祖父を連れて峯先生を訪ねた。峯先生は柔らかな口調で祖父に話した（飯田、1942, p.112）。「五年、いや十年先のことを考へていただきたいのです。内鮮一體といふ事が本當に出來上つた場合…いや内地だの朝鮮だのといふ區別がなくなつた場合ですね、そんな時代がきつと近くに來ることは間違ひないです。…その時にです。その時にですね、相變わらず秀永君は、くむ・すよんでいゝのか、みんなと同じ道を歩まないで、くむ・すよんでいゝのか。その時に秀永君が、お祖父さんがよく變えないでゐてくれたと喜ぶかどうか…です」。祖父の動搖は激しかった。「祖父の唇が、激しい感情を映して動いた。けれど、それは餘にも激しいために一つの言葉とはなり得ない焦慮を帯びてゐたのだ」。創始改名を踏み絵にされ苦渋に満ちた祖父の顔が目浮かぶ。「…それに創氏という事は、決してしなくちゃならないことじゃないのですよ。たゞ折角の機會ですから、ようくお考へになつたほうがいゝのじゃないかと思ひますが…」。峯先生の「この柔らかな牽制は祖父の意志を決定的なものにした」。物語には創始改名（日本）に対する祖父の抵抗はまったく書かれていない。「先生、みね先生様（そんせんにむ）、お話はようく分かりましたわい。年寄りはどうも頭が古くて…いや三年前のあの事を考へましたら、じつとして居られませんかわい。漢文でしたら農にも考へがありますが、とても内地の名前などよひのは考へられませんかわい」。秀永の尊敬する峯先生の名にあやかることになる。「孫が、どうか、みね先生のみねに—これはどうでせうかな、先生ので濟みませんことですが—してくれてきかないのですが…」。こうして創始改名は、自発の名の下に進められていった。「秀永君、先生の名前が欲しいのか。宜しい上げるぞ、上げるぞ。名前も先生がいゝのを考へて置いたぞ、邦彦、く・に・ひ・こ と云ふのだ。先生の先生のお名前だ。大變偉ひ先生だった。先生は今でもお手紙を缺かしたことがないのだ。どうだ、みね・くにひこ いゝな、いゝな」。学校を通じた子どもへの働きかけで創氏改名が図られた一端を示すものであろう。「峯先生は自分の言葉に一層感動していくのだった。秀永は大きな瞳からぼたり、と大粒の涙を落としたまんま、私はうとしないのである。一学級は一せいに創氏した」。一心に先生を慕うけなげな子どもを介した、「内鮮一體」に向けた住民に対するあの手この手の懷柔策は、むごい民族支配の実態を表している。

著書が太平洋戦争まっただ中で書かれていることを考えると、皇国美談風に誇張されている面があることは否めないであろう。しかし、著者飯田の「あとのことば」を読むと、当時の朝鮮半島の「皇国民教育」の実像を描き出していることも真実であろう。「十四歳の春から半島の子供たち

に明け半島の子供たちに暮れ、二十年近い年月を送ってしまった」と、飯田は述懐している。「ひたむきなよき皇国民への歩み。それはたゞ半島の子らのまさしく唯一の歩みでありあるべき美しき姿以外ではない。かうした半島の子供たちの眞實な姿をたゞ一人でもいゝ。私は内地の人に理解されて欲しかったのである」。朝鮮教育令により、国内に勝るとも劣らぬ皇国民教育が施された。飯田が、日本人としてのアイデンティティを朝鮮半島の子どもたちに一人残らず形成する使命に燃えていたことを、回顧は物語る。大東亜共榮圏の完成を信じて疑わなかった。「私は内地の人々に改めて云はう。一億の中に持つ二千五百萬の力を。そして、内鮮一體と云ふことが決して理想であつてはならず、まさしくそれは即刻要求せらるべき現實でなくてはならないことを。私は、内鮮の體一的な結びつきが、ある意味に於いて直ちに大東亜共榮圏完成への聖業に連なることを固く信じてゐる。激しい論理を積みかさねれば、内鮮一つの完全なる歩みのみが聖業完遂の近さをも暗示してゐるのだ」。この作品は、記録風の創作であり、「主として鄙における半島の子らの生活のみを取り上げた」と述べている。加えて、「これが現實の半島の子らの姿の全部では勿論ない、また洞里的すべても勿論ない。私はこれに示し得られなかった子供の他の面々をも幾多ものしてゐる」と懐古し、「上梓に當つて、私の脳裏に美しく彩られるものは、やはり二十年の半島の子らとの美しい想ひ出のみである」、と結んでいる。さらに筆者は、この物語を自らの経験を元に書いたもので、師弟の間には幾多の感動的な逸話があり、「…未だ書くべき、いや、書かなくてはならない事實の多くを持ってゐる」と述懐し、記録書であることを強調している。

(4)「創氏改名」と朝鮮民族のアイデンティティ 「半島の子ら」は、「内鮮一体」の教育を「誠実」に進める峯先生の懐古美談として書かれている。そこには、先祖伝来の一族の系譜と名を奪われる朝鮮民族の苦悩・懊悩と抵抗はまったく語られていない。ソウルで生まれ、朝鮮総督府の官吏だった父をもつ梶山(2002)は、創氏改名が朝鮮人に与えた精神的、物理的な苦しみを描き出した。「日本のとつた植民地政策の一つで、朝鮮人の姓名を日本風に改めさせ日本人と同等に待遇しやうといふ政策である。勿論、内鮮一体政策のなかから生まれてゐる。しかも、当局自慢の政策であつたといふ」(梶山, 2002, p.250)。朝鮮人に恩寵を与えるかの美辞麗句をとりさり、創氏改名の本質を暴いた。「創氏改名が實際内鮮一体といふ親睦の意味から誕生したものではないことは明らかである。それまで不当に待遇されてきた朝鮮人たちを、世界に冠たる日本国民として同等に待遇しやうと表面では好餌を曝しつゝ喧伝しながら、創氏改名の暁に当局が彼らに与えたものは何であつたろうか。日本国民であるが故に果たさなければならない義務として賦された税金であり、供出であり、そして徴兵だった」(梶山, 2002, p.250)。梶山は、「創氏改名」の目的は内鮮一体、朝鮮人の皇民化であり植民地支配の一環であつたことを指摘する。

作者の梶山は、族譜に書かれた時期には11歳であり、「植民地責任」を自覚する年齢ではなかつた。「しかし、植民地政府に勤める役人の子として、植民地で生まれ育つた『植民者の子』として、宗主国人としての侵略責任は、大きな意味として植民地朝鮮に居住していた日本人全員にあつた」という(川村, 2002)。梶山の小説がすべて事実に基づくものではないにしても、朝鮮総督府が進めた皇民化、「内鮮一体」の政策と現実を強く反映していることは確実である。アフリカの住民が奴隸として「新大陸」に売買されていったとき、彼らは、歴史的・文化的に時間的空間的な奥行きと広がりをもつ人としての呼称が剥奪され、民族史に連なる自己の固有の存在感を根こそぎ奪われた。創氏改名は、これと同じ意味を持つものであつたにちがいない。「族譜」で梶山は鋭く指摘する。「朝鮮民族が日本民族の名を冠せられるといふことが、果して彼ら自身の幸福かどうかは疑問であつた。若し、この立場が逆であつたらどうであろうか。日本人は喜んで、李氏朴氏を名

乗り、朝鮮への忠誠を誓ふであらうか。国を奪はれ、国語を奪はれ、今また姓名まで奪はれやうとする民族感情は、果して穩に終始しうものであらうか」(梶山, 2002, p.255)。創氏改名が強権を持って強制される事態に至って、悲惨な事件も起こった。日本の官権の検閲と創氏改名への圧力はすさまじかった。「京城帝国大学」への入学は、創氏改名を行った子弟のみに認められた。「その頃となつては、最早創氏改名は法律であり、殆どその政策は全鮮に徹底したやうにみえた。戸別廻りの警察官は標札が書き改められてゐないと、牢屋に入れると威し、民衆は恐れて日本名の標札を掲げて牢屋入りを免れた」(梶山, 2002, p.263)。民衆は、力を以て追い詰められたのである。梶山は、地方の旧家を継ぐ薛鎮英にその苦境を語らせている。「『この創氏改名』だけは薛鎮英には出来ないです。薛家何百年の歴史が、薛鎮英の代で断絶したら、祖先が泣きます。孫は私を恨みますぢや。それを考えると、どうしてもお断りするしかないです。断るしか…」(梶山, 2002, p.255)。薛鎮英は井戸に身を投じ、自ら命を絶ってしまうのである。典拠ははっきりしないが、実際の事件を題材にしているという。創氏改名が一族の断絶を意味するほどに深刻な意味を持って受けとめられていたのである。

(5) 言語支配とアイデンティティ 「木槿の咲く庭」(パーク, 2006)の中でも、創氏改名の実態が庶民の目で描写されている。著者は、韓国系アメリカ人二世である。朝鮮における皇民教育は徹底していた。物語の中で、1940年の日本語教育の現実を妹スンヒに語らせている。「わたしたちは、今でも家の中では朝鮮語を話す。でも、一歩外へ出たら日本語しか話さない。壁に耳あり。もし朝鮮語をしゃべっているのを巡察兵に聞かれてもしたら、それこそ大変なことになってしまう。巡察兵たちは、お年寄りは見逃しているみたいだけど、わたしたちみたいな子どもは用心しないと」(パーク, 2006, p.9)。子どもたちは、学校教育を通じて日本語を「母国語」として教え込まれていた。アイデンティティの形成は、ことばだけの問題ではなく、生活のすべてが関わる問題であり、民族の歴史に深く根ざす問題である。「学校の授業は全部日本語で行われる。わたしたちは、日本の歴史や文化、そして日本語を勉強する。学校では、朝鮮語や朝鮮の歴史を教えるはいけないうことになっているし、朝鮮語で書かれた本や新聞だってめったに見かけない。それに、朝鮮の民話を語るのさえ禁止されている」(パーク, 2006, p.8)。「半島の子ら」で語られていることと一致するものである。さらに、こうした教育も監視された。「…教室には監督がいた。わたしたちの先生は朝鮮人だけど、先生たちの上には日本人がいる。大西という名前のその人は、わたしたちの学校を担当している監督官で、生徒全員がちゃんと皇民教育を受けているかどうか確かめる仕事をしている。監督が現れるとわたしたちはきまって勉強を中断してお辞儀をする。監督官は、教室の後ろに立って授業を観察するので、先生まで緊張してしまう」(パーク, 2006, p.28)。日本式の教育が貫徹されていた。「校庭で行われる朝礼では、全校生徒が集まって、『皇国臣民の誓い』を読み上げる。朝礼では他に『君が代』も歌うし体操もする」(パーク, 2006, p.32)。東アジア一帯に日本の教育を施すために教育令が敷かれ、朝鮮には朝鮮教育令が出されていた(坂西, 2006)。

私たちの精神的活動を支えるのに大きな役割を果たす母国語を剥奪されことは、自己を形成する上で計り知れない影響を及ぼすことになる。他の民族を皇民に「一体化」するためには、感性的なレベルでのアイデンティティ形成も重視され、教化が行われた。兄のテヨルは語る。「理科や数学はましだ。ただし、そういう科目は学校では一日にほんのちょっとしか教えてもらえない。授業の大部分は日本語だ。一に日本語、二に日本語、三四がなくて五も日本語。おまけに最悪の漢字ときたもんだ」(パーク, 2006, p.38)。韓国語を廃し、日本語漬けにしたのだ。さらに自然まで



も改造し、日本文化を浸透させた。「また日本が新しい命令を出したらしい。『桜の有る家は、若木や若枝を警察まで持っていくこと』というものだった。小さな桜の木を街中に植え、みんなで大事に育てようという。お役所では、たくさんの桜でこの国をもっと美しくしよう、と言っているみたいだけど、きっとそれだけじゃないんだと思う。だって、桜は日本を代表する花だから」(パーク, 2006, p.43)。この命令は「すべての木槨を取りのぞき、焼き捨てること」という命令と合わせて出された。

1942年頃の状況を妹のスンヒイが語っている。「日本人は、非常時に私たちが緊急集合できるように愛国班を通じて訓練を始めた。数年前から始まった愛国班のしくみはこうだ。隣近所を一組にしてひとりの班長さんが選ばれ、日本の役人達がその人たちに命令や知らせを伝える。通達を受けた班長さんは、拡声器を使って自分の班の全員を集合場所へと集める。そして、その声を聞いたわたしたちは、その時していることを一切やめて、急いで家を飛び出さなければならない」(パーク, 2006, p.82)。愛国班では、日本語で点呼が行われ、最低限であれ日本語で数を数えられることが不可欠であった。

「神風特攻隊」に朝鮮人として志願した兄のテヨル(1945年)に、創氏改名の現実をつぎのように語らせている。「訓練所は京城郊外にあった。広大な敷地に、たくさんの兵舎と何棟かの建物が建っていた。僕たちは、一列に並んで登録をすませたのだが、その際、全員が、日本名と朝鮮名の両方を記載しなければならなかった。日本名を書く理由は、僕たちが大日本帝国の臣民だから。朝鮮名は、軍がぼくらは本当は日本人じゃないことを把握しておくためにだ」(パーク, 2006, p.191)。創氏改名が、皇国臣民への精神的一体化を強要する道具として用いられたことがよくわかる。「日本人は僕らから、米と母国語、そして名前まで奪った」(パーク, 2006, p.92)。しかしそれだけではなかったのだ。1942年、1943年頃のスンヒイは、母国語を強奪される民族の心の苦しみを訴える。「わたしには、日本人の考えていることが理解できない。日本人は、本気で、わたしたち朝鮮人が日本人になったと思っているのだろうか?」(パーク, 2006, p.136)。「一度も教わったことがないから、わたしには朝鮮語が書けない。朝鮮の心を、日本語で綴るなんてことができるのだろうか?」(パーク, 2006, p.141)。母国語を奪うことは、人々が、自国の森羅万象を感じ、思考する道具を略取し、支配国の言語で異質な感性を物心つく前から身につけさせる、究極の文化的侵略であった。

「アボジが新聞を読み上げた。『天皇陛下のご命令により、朝鮮人はありがたくも日本名を名乗る栄誉を与えられた』。『ありがたくも…』叔父さんうなるように言った。怒りで声が震えている。『詭弁もはなはだしい!正直に言ったらどうだ、われわれは強要すると』」(パーク, 2006)。峰先生が美談で語るように「半島」の人びとは創氏改名を従順に受容したのではない。「私の名前は私の魂だ!」。日本の近代化の過程で、アジアにおいて他民族の個と文化の抹消が進められたことは、心理学研究で顧みられることはほとんどない。固有の名前が個の存在と個人の人格の形成に分かちがたく結びついていること、当人のアイデンティティの形成に重く深い意味を持つことを、私たちはしっかり認識しなければならない。

## 2 「人種」・「民族」ステレオタイプと偏見

人種差別・偏見には、それぞれの長い歴史がある。「人種」・「民族」に関わる偏見の研究は、心理学では態度研究の一つとして積極的に進められてきた。態度は、主に認知的成分、感情的成分、

行動的成分の3つから構成されると仮定されることが多い。特に、偏見は、この3つの要素の一つである感情的成分が強く関わりと考えられている。それも、他の人々や集団に対して、否定的な感情を伴うときに偏見が生まれやすいといわれる。この章では、「人種」・「民族」的偏見をステレオタイプと関連づけながら、心理学の視点から整理し、考察することにする。

(1) “ステレオタイプ”の起源とその特徴 ステレオタイプ (stereotype) とは何か。ステレオタイプの語は、印刷の過程を記述することばから派生したといわれる (Nelson, 2002)。材料の固定された鋳型が再生産される印刷の過程を指すことばである。ところで、人は、だれかある人が二人以上存在する場合、それらの人々が共通に分かち持つ特徴に基づいて、ひとまとまりにして考える、つまり同じ性質を持つ同類として考える傾向がある。リップマン (Lippmann, 1922) は、対象の属性の共通性に着目して、同じ鋳型に適合するか否か判断し分類する私たちの思考の傾向を表すのにステレオタイプということばを用いた。私たちは、外界にある対象を全て固有の異なる性質・特徴を持つものとしていつも厳密に区別して認知しているわけではない。私たちの「頭の中」にある同じ「鋳型」・「型版」にあてはまる人や物は、類似した性質や特徴をもつと考えて「分類」・「整理」する。雑多で混乱をもたらすほど入り組んだ現実の情報は単純化されるのだ。情報のこうした単純化・定型化は、混沌とした現実の世界を理解しやすくしてくれるのである。リップマンは、ステレオタイプは文化によって作り出され、重要な情報と無視すべき情報を私たちに指し示すと考え、その後の研究は彼の見解を支持する結果を得ている。

1970年代に進められた社会的認知の研究は、ステレオタイプ化は、私たちが外界について考えるときに本質的に備わっているカテゴリー化の自動的過程であることに注目させた。Nelson (2006) は、ステレオタイプのとらえ方には主に3つの見解があるという。一つは、特定の個人ではなく、ある集団の持つ特性について一般化された考えがステレオタイプである、とする立場である。第二は、ある人間集団を人が認知するとき、その集団について形成されるその人の知識、考え、期待を含む認知的構成体 (a cognitive structure) がステレオタイプである、とする立場である。第三は、ある集団に属する人々の個人的属性についてのひとまとまりの考え (信念) がステレオタイプである、とする立場である。Nelson は、第三の定義を採用している。なぜなら、この定義は、従来から主張されてきたステレオタイプに本質的な要素、つまりある集団に属する個人の特徴を一般化することを重視する見解だからだ。

**ステレオタイプの定義** 何を重視するかによってステレオタイプの定義は異なる。ここでステレオタイプの意味と内容を把握するために、最近の文献から定義を見てみよう。Albarracín ら、(2005) は、「ステレオタイプは、記憶に蓄積されるある社会的集団の認知的表象として定義される」と述べ、「この認知的表象はその社会的集団にある種々の特性 (“怠け者” など) あるいは行動 (“朝から晩まで寝ている” など) と結びつける」働きをもつと指摘する。

Whitley and Kite. (2006) は、Hamilton and von Hippel (1996) のステレオタイプの定義を用いている。「ステレオタイプは、いろいろな集団の成員の諸特徴、諸性質、そして諸々の行動についての考えや意見である」。ステレオタイプには鍵になるいくつかの特徴があるという。第一は、ステレオタイプはそれぞれ個人の頭の中の像であるにもかかわらず、同時にそれらの像は私たちが共有する文化の統合された一部である信念をも反映しているということである。ステレオタイプは、各人によってきれいに整理されているかもしれないが、その信念の内容に関しては集団の合意がある。ステレオタイプに関する情報は、その人の直接的な観察や、メディア、仲間、両親、古典文学や現代文学などさまざまな情報源から得られている。第二は、ステレオタイプは正確であ



るかもしれないし、不正確であるかもしれない、ということである。第三は、ステレオタイプは、記述的 (descriptive) であり、かつ規範的・指示的 (prescriptive) である、ということである。集団成員に関するステレオタイプは、その集団の成員が持つと考えられている諸特徴を「記述」することである。記述と同時に、ステレオタイプは、私たちに、その集団に属するメンバーのあるべき姿をも明示している。ステレオタイプが規範的な要素を多く持てば持つほど、ステレオタイプ化された集団の成員をより強く制限することになるのである。第四は、ステレオタイプ化された信念 (考え) は、肯定的または否定的である、ということである。

また、Arbin and Thyer (2004) は、ステレオタイプに次の定義を適用している。「定義からすると、ステレオタイプは、社会集団 (social groups) あるいは区分されたある社会組織 (segments of society) に諸特徴を帰属することである」。「黒人は怠け者だ」、「アジア系アメリカ人は勤勉だ」、「ユダヤ人はよくいかがわしい金融取引をする」などを、人種・民族ステレオタイプの例としてあげている。すべてのステレオタイプが否定的であるわけではないが、研究でとりあげられる場合肯定的なものは少ない。

では、社会心理学の概説書でステレオタイプはどのように定義されているのか見てみよう (Worchel, et. al, 2000)。ステレオタイプは信念 (考え) であるという。とりわけ、ある集団の成員が共通に特定の特徴を持つという部外から見る者の信念である。偏見は情動的感情を含むが、ステレオタイプは認知的なものである。ほとんどの社会心理学者は否定的なステレオタイプにもっとも強い関心を示してきたが、偏見のように、ステレオタイプにも否定的な内容をもつものと肯定的な内容をもつものがある。ステレオタイプは、本質的にはスキーマ概念と類似していて、集団に関するスキーマといえる。特定の集団に属する人々に関する私たちの知識を表すのがステレオタイプである。

拡散する定義を要約する意味も込めて、ステレオタイプと態度との関係を考察することによって、ステレオタイプの特徴をはっきりさせよう。多くの研究者は、ある集団に対する態度の認知的な部分だけを表すものとしてステレオタイプを理解している。したがって、認知的成分のみからなるステレオタイプは、認知的成分・感情的成分・行動的成分の3成分から構成されると仮定される態度とは区別される。一般にステレオタイプは肯定的—否定的な感情を含まないものとして定義される。例えば、ある集団が“乱暴”な性質を持つと認知しても、その人が当該の集団を嫌っていることと同義にはならない。肯定的ないし否定的ステレオタイプは、ある集団に望ましい性質あるいは好ましくない性質を帰属する信念であり、情緒的感情的反応ではないのである (Nelson, 2006)。したがって、感情的反応と評価を重要な要素とし、態度として定義される偏見とはステレオタイプは異なるものであることが理解できよう。

ステレオタイプは、私たちが人々をカテゴリー化するある種のやり方である。カテゴリー化は、多種多様な人々に関する私たちの考えを秩序立てることを可能にし、私たちが日々曝される膨大な量の社会的な情報を分類し整理することを可能にする。人をカテゴリーに分けることはさらに大きな心理的な効果を生むことが明らかにされている (Hamilton and Trolie, 1986, Fishbein, 2002)。ある人が一つの集団 (内集団) のメンバーであり、自分の集団と別の集団 (外集団) のメンバーとを比較するとき、次のような特徴的な効果が現れる。①内集団メンバーと自分は、外集団メンバーと自分以上に似ていると考える傾向が強い。②しかし、内集団のメンバーは、外集団のメンバーの個人差は小さく (みんな似ている)、内集団のメンバーの個人差は大きい (だれもが個性的である) と考える傾向が強い。③内集団メンバーと外集団メンバーの心理的特性を評定さ

せると、外集団メンバーの心理的特性をより極端に評定する。④外集団メンバーのよい面（肯定的なことから）よりも、内集団メンバーのよい面（肯定的なことから）の方がよく思い出され、逆に外集団メンバーの悪い面（否定的なことから）については、内集団メンバーの悪い面（否定的なことから）よりもよく思い出される傾向が強い。⑤内集団メンバーと外集団メンバーの同種の行動に対して、内集団メンバーには肯定的な原因を、外集団メンバーには否定的な動機を帰す傾向が強い。

Brown (1995) もまた、ステレオタイプ化することは、人々をカテゴリーへ分類することだととらえている。「ある人をステレオタイプ化するということは、その人の所属集団の成員全員もしくは大部分が共有しているとみなされている諸特性を、本人自身も備えている、とみなすことである。言い換えれば、ステレオタイプとは、ある人を任意のカテゴリーに割り当てることから生じる推論である」。本書では、ステレオタイプを次のように定義しておこう。ステレオタイプは、人があるカテゴリー（集団）に属するものとして分類し、その集団の成員だと見なす場合に、当該の集団に属する人はみな共通した特徴や特性を共有すると考え、集団メンバーの特徴や特性について思い描くイメージである。ステレオタイプには、対象となる人に対する感情的な好悪はほとんど含まれない。

**(2) 偏見とその特徴** 偏見は、まさにある対象に対する先入観 (prejudgement) であり、肯定的ないし否定的いずれかの評価である (Nelson, 2006)。オルポート (Allport, 1954) は、偏見の感情的な面を重視した。その後ほとんどの研究者は、感情的反応を中核とする偏見の定義を否定し、偏見を態度に含まれるものとしてより広く定義している。1960年代以降の社会的認知研究（バランス理論、認知的不協和理論、帰属理論等）の隆盛によって、研究者は偏見をある刺激に対する評価であると見なし始めた。対象に対する感情的な反応や評価を重要な要素とする偏見は、本質的には態度であり、認知・感情・行動の各構成要素からなると考えられるようになった。オルポートが重視したように、感情のみを重視する偏見の初期の定義の最大の欠点は、外集団に対する否定的な面にしか焦点を当てなかったことである。否定的感情のみが偏見の構成要素だとすると、今日ではよく知られる、自分が所属する内集団に対する好意的な評価や反応はまったく問題にされなくなってしまうのである。最近の研究から少なくとも2つのタイプの偏見が存在する可能性があるということである。一つは、ある集団に対する強い否定的な感情によって惹起される偏見である。この場合、その集団に対して肯定的感情をまったく持っていないことを前提にしているわけではない。他の一つは、特定の外集団に対する否定的感情を持ち、同時に肯定的感情を持たないときに偏見が生じる場合である。

ステレオタイプもそうであったが、偏見もまた研究者によって重視する点が異なり、定義もいろいろである。偏見の特徴を知るために、いくつかの定義を見てみよう。Albarracín, ら. (2005) は、「偏見はある集団に対する否定的な感情反応、評価、ないしは態度に関わるものである」と述べている。否定的な感情反応だけでも偏見であり得るととらえる、広義な定義である。Fishbein (2002) は、否定的態度に限定し、偏見を次のように定義する。「偏見は、他者がある特定の集団の成員であることを理由にした、その人に対する不条理な (unreasonable) 否定的態度である」。

Whitley, and Kite. (2006) は、次のように偏見を定義する。「特定の社会集団の成員であるが故に、その人々に対して向けられる態度を偏見という」 (Brewer & Brown, 1998)。態度は、一つの社会集団全体ないはその集団に所属する個人に対する評価 (evaluation) だと考えられる。態度の中でも感情的な反応が、偏見に大きな働きをすることを重視している。

また、Arbin and Thyer (2004) は、人種偏見を分析するにあたって、「偏見は、証明ないしは系統的な証拠なしに展開されるある個人、ある集団、あるいはある現象についての意見として定義できる」、と述べている。偏見は予断であり (prejudgement)、好ましいものもあるが、多くの場合非好意的なものであり、地方の法律や慣習の形をとって制度化されるという。この定義は、偏見はその社会の文化や習慣を背景に形成され、生み出された偏見は巡りめぐって制度や生活上の慣例などに反映することを示唆している。ところが、同じ本の中で、Slocum and Lee(2004)は、異なる偏見の定義をしている。「定義によれば、偏見はあるグループの一部のメンバー (some members) ないしはあるカテゴリーに属するものごとに対する否定的な態度である」。偏見は、対象に対する否定的な態度に限定されるとしている。

Worchelら (2000) の社会心理学のテキストで定義されている偏見は次の通りである。「偏見は態度であり、通常は否定的な、ある集団の成員に対する態度である。だれかについての評価であり、その評価はどこか他の集団に所属し評価対象にされるその人の人種、性、宗教、会員資格にもつばら基づいて行われる。肯定的な偏見も存在するにもかかわらず、社会心理学者は否定的な偏見を理解することに焦点を当ててきた」。肯定的な面と否定的な面の両面が偏見には含まれるとし、両者のバランスを考慮した見解をとっている。

Brown (1995) は、2つの注釈をつけた上で、偏見は次の中のどれかあるいはすべてであるという。「ある集団の成員であるとの理由で、その集団の成員に対して、軽蔑的な社会的態度や認知的信念の保持、否定的感情の表明、敵意や差別的行動の誇示などをする事」。一点目の注釈は、「その用語をこのように広い意味で使用する事によって、偏見を、性差別や人種差別、同性愛恐怖などの類似した他の用語とおおむね同義語とみなすことができる」ということである。第二の注釈は、「偏見を単なる認知的、あるいは態度的現象と考えるべきではない。それは行動の立ち居ふるまいに現れると同様に、私たちの情動を引き起こすことができる。したがって、歪められた態度、敵意感情、および差別的あるいは圧制的行動との関係をはっきり区別しようとは思わない。…偏見の認知的側面を強調し、その感情的、行動的要素をどちらかという軽視する現代の社会心理学の一部の傾向と対照的な立場である」。Brownは、感情的な面が偏見に果たす役割の大きさを強調する。「日々の生活で私たちが実際に経験している偏見の情動的な面（負荷）の性質を無視することは、偏見についてもっと基本的な何かを見落とすことになる」。彼は、情動的・感情的なものは、偏見に深くしみ込んでいて分ちがたく、両者は一体だという。

全体的に、偏見の定義には態度のうちの否定的な面を重視するものが多い。ある集団に対する否定的感情の果たす役割は大きいが、感情や情動の性質を考えてみたとき、偏見の感情・情動面のみを強調するのは一面的すぎる。情動の生起に関しては、感情と認知の二要因説が一般に認められている。感情・情動と認知とは密接に関係しているのである。情動と認知が分離するか関わり合うかは、この二つの主要な情動回路（情動と認知が密接に関係する場合と情動と認知は脳の独立した過程として生起する場合）のいずれが関係しているかによっている。情動—認知分離説は、意識的情動システムと無意識的情動システムの違いを想定する。それに対して、情動—認知連結説は、意識的情動回路に焦点を当てる (Zimberdo, Johnson, and Weber, 2006)。また、日々の私たちの感情状態は、感情と一致した社会的判断をするよう強い影響を及ぼす。社会的判断を色づけるこうした感情の効果は、暗黙のメカニズムないしは表に現れたメカニズムのいずれかで起こると考えられている (Forgas and East, 2003)。

偏見に果たす感情や情動の役割は大きいとしても、認知的、行動的な要素も相互に作用し合い、



総体として機能することで偏見が生まれると考えるのが妥当であろう。

(3) **ステレオタイプと偏見** 最後に、ステレオタイプと偏見の関係にふれておこう。両者は密接な関係にあることが認められている。Zimberdoら、(2006) は、ステレオタイプを偏見を引き起こす重要な要因の一つとして注目している。なかでも、メディア・ステレオタイプ (Media Stereotype) を偏見形成の代表的な一原因と見なしている。「フィルム (映画)、プリント (印刷物)、テレビでいつも習慣的に人々の集団を描き出すステレオタイプ化されたイメージが、偏見を持った社会的規範を強化するとき、これらのメディアは偏見を生み出す一つの原因になる。しかし、このようなイメージは、通常はほとんど無害であるという。なぜなら、私たちは、偏見の多くを、TVや映画や本や雑誌など数多くの媒体によって描写されるステレオタイプを見ることによって学びとっているからである。他方でメディアのイメージは、ステレオタイプ化された規範を変える力をもつとも指摘する。黒人パワーによる社会運動が (Black Power Movement) がメディアの注目を集めるまで、アフリカ人とアフリカ系アメリカ人は、映画やTVで「単純 (simple)」、「のろま (slow)」、「滑稽なキャラクター (comic character)」としてもっとも頻繁に描き出されていた。こうした (黒人) 像は、多くの白人が昔からずっともち続けてきた“サンボ (Sanbo)” の不変のイメージを脈々と伝えているのである (perpetuate)」。メディアが媒介するステレオタイプは、減少しているとはいえ、現在でも「健在」である。ステレオタイプに、特定の感情、特に否定的な感情が加わると、特定のカテゴリーに属すると見る人々に対する見方 (認知) は、大きく歪められる可能性が高くなり、偏見へと発展しやすい。

ハッチンソン (1998) は、ステレオタイプが人々に及ぼす影響力の大きさを強調する。「旧時代の人種ステレオタイプがいつまでも、くり返しくり返し確認され、立証され、深められていくと、ついにはそれ自体一人歩きするようになる。新聞・雑誌に登場する若者ブラック・メイルは、ギャングや麻薬売人ばかりである。特別優等生奨学金や全国科学基金の奨学金を受給する黒人青年が登場することはほとんどない。たぶんそんな者は存在しないし、黒人にはその能力がないという前提からであろう。社会的に活躍し、優れた成績を修める黒人青少年が、新聞雑誌上に掲載されることはめったにない。こうした記事が、単なる報道を越えて、若者ブラック・メイルの将来を決定する冷酷な予言として機能するのは当然である」。ステレオタイプは、まさに予言的にその対象と内容を提示することによって、ステレオタイプそのものを人々の心に徐々に定着させ、現実化させていくのである。認知的要素からなるステレオタイプに感情的要素が強く作用することで、中性的であったステレオタイプが偏見へと発展していくと考えられる。

### 3 人種ステレオタイプと偏見の測定

前の章ではステレオタイプを定義し、偏見との関係を考察した。ステレオタイプと偏見には、対象の違いによっていろいろなものがあり、私たちの日常生活に深く関わるものである。ステレオタイプや偏見が生み出す弊害を、どのようにしたら回避できるのか。ステレオタイプや偏見は予防できるのか。いったん形成された偏見は、弱めたり、減少させたり、修正したりすることができるのか。ステレオタイプや偏見を分析するためには、まずそれらを私たちが取り扱うことができるように定義 (操作的定義) し、客観的に対象として取り出し「実体」のあるものとしを把握できるようにしなければならない。対象として把握することができなければ、実際にそれぞれの人が、どのようなステレオタイプや偏見を持っているのかを知ることができないからである。どのような条件

の下で、どのような経験をすることによってステレオタイプや偏見が形成されるのか、さらにそれらは働きかけ方や環境条件を変えることによって、修正したり、なくしたりすることができるのか。こうした具体的、現実的な対応は、ステレオタイプや偏見に形を与え、操作可能なものにすることで初めて検討することができるのである。この章では、「人種」ステレオタイプと偏見をどのようにして形のあるものにするのか、いろいろな概念的検討について触れながら、実際にそれらを測定する方法について考察する。

(1) **ステレオタイプ・偏見の測定の困難** ステレオタイプや偏見はどのようにに定義され、どのような方法を用いて測定することができるのであろうか。社会を構成する多数者の集団が実権を持ち、支配的な位置を占めていた時代には、少数者の集団に対する差別や偏見は問題にされることはなかった。社会で多数を占める人々は、少数者の集団に対するステレオタイプや偏見を表明し、意見を述べることをはばかることはなく、後ろめたさや抵抗を感じることもなかった。とりわけ、「黒人解放」後もアフリカ系アメリカ人を二級市民として差別し続けてきた合衆国では、人種差別問題が厳しく問われたのは1950年代になってからのことである（バーダマン，2007）。20世紀中半から後半にかけての公民権運動は、偏見・差別問題の取り扱いに絶大な影響を及ぼした。こうした差別反対運動は、日本にも部落差別、女性差別（ウーマン・リブ：1970/10/21旗揚げ）、障害者差別、民族差別など、差別反対運動を展開する形で大きな影響を与え、社会的マイノリティ・弱者に対する偏見・差別を正面から捉える重要な契機になった（佐々木他，1991，p.339）。

Nelson（2006）は、アメリカにおける偏見のとらえられ方の急激な変化の社会的背景を次のように説明する。「かつて白人は、偏見のある人種的態度を揚々と明け広げに口にすることができた。それは、アメリカ社会の文化が、他の人種に対するあからさまな敵意、差別、そして他人種を白人が支配する文化から隔離することを標準的なものとする文化だったからである。そのため、1920年代末になるまで偏見とステレオタイプの問題に深刻な注意が注がれることはなかったのである」（Nelson,2006，p.112）。奴隷制が廃止（1865年）されてから、白人は黒人を支配し続けるためにあらゆる法律を作り上げていった。これらの法律は、合衆国内の奴隷制を廃止し、合衆国で生まれ、帰化したすべてのアフリカ系アメリカ人に市民権を与え、法による平等な保護を保証した合衆国連邦法を無効にするものであった。1890年までにアフリカ系アメリカ人の法的権利を奪うことができる法や規則を作り出し、ときには暴力に訴えてでも人種差別を維持し、日常生活の隅々にまで徹底的に浸透させ、白人至上主義を貫徹させた（黒人に対する一連の法的規制はジム・クロウ法と呼ばれている）。白人と黒人の法の下での平等は名ばかりで、はばかることなくどこであれ白人は黒人を侮蔑し、人種差別は公然と行われていた（バーダマン，2007）。「1950年代末と1960年代の市民権運動によって、アメリカ合衆国の社会的、法的、政治的風土が劇的に変化する以前には、ステレオタイプと偏見は、かなり容易に測定することができた。研究者は、簡単な自己一報告尺度（例えばKatz and Bralyの形容詞チェックリスト法）を用いて他の集団に対する否定的な感情の内容と程度を理解することができた。

しかし、市民権運動と法制化は、ステレオタイプと偏見に関わる社会的景観を一変させた。1950年代に入った頃には、アメリカ社会における黒人の社会的地位、権利は、大きく改善の方向に動いていた。1953年に発行された子ども向けに書かれた百科事典には、「黒人」について次の記載がなされている。「黒人は、アメリカ人の中で最も古い移民定住者である。ジョージワシントン以前の時代、彼等は750,000人、全人口の1/5を占めていた。今日、黒人は、国民の1/10を構成し、13000,000人を越える。しかし、アメリカの黒人の出発は早かったものの好ましい

(favourable) もものではなかった。アフリカの祖先のほとんどは、自由移民としてこの大陸に来たわけではなかった。彼等の意に反して奴隷として連れてこられ、主に南部のコロニー（農園）で召使いとして雇われ、労働者として雇用された。彼等の労働は、南部の大量の綿、米、砂糖プランテーションを築きあげる力になった。黒人問題についてあなたたちにお話ししましょう。この問題は、合衆国の物語の中で、国をほとんど二つに分けたほどの問題でした。この説明項目では、尋常でない困難に立ち向かい、偉業を成し遂げた何人かの黒人男性と女性についてお話ししましょう。最大の困難とは、もちろん、奴隷そのものです。何人かの黒人は、決して奴隷ではありませんでした。またあるものは、奴隷所有者から逃げ出すことに成功しました。さらにある者は、主人によって開放されました。1860年までに、500,000人の黒人奴隷が開放されました。しかし、その数の8倍の黒人は、依然として奴隷のままだったのです。1865年以来、この年は第13回の憲法改正の年で、すべての黒人が法的に開放されたのです。この日は、黒人の物語のもっとも偉大な折り返し点になったのです。1865年以前の時期は、奴隷であるが故に、過酷で、不公正で、絶望的な時代でした。市民戦争後の時期は、これもまた厳しい苦悶の時代でした。しかし、苦しい闘争は、勇気づけであり、希望であり、この勇気と希望が、奴隷からの解放、市民権の獲得を成功させるに至ったのです。奴隷制時代に、すべての黒人を停滞させていたのは、彼等の能力が欠如していたからではなく、むしろ教育の欠如と機会が与えられなかったことが原因だったのです。このことは、何人かの黒人が、機会に恵まれると偉業を成し遂げていることによって証明されています」(Locke,1953)。黒人が、奴隷から解放され、力を発揮する時代を迎えたことを、子どもに説いている。

しかし、この子ども向けの事典が編纂された1953年は「ブラウン対教育委員会裁判」の判決が出る1954年の前年である。白人と黒人の通う学校は分離され、バスやトイレなどの公共交通機関や施設の利用も白人用と黒人用に分けられていた時期である。人種差別は当たり前であり、白人の誰もが黒人差別と偏見を当然のこととして表明し、行動していたのである。

1950年代に入り、人種差別を告発する動きが活発化し、実質的な人種平等を求める告訴が相次いだ。前述の「ブラウン対教育委員会裁判」は、公民権運動の先駆けとなる裁判であり、1951年に告訴されていた。8歳のリンダ・ブラウンは、自分の家のすぐ近くにある小学校には通えず、21ブロック（約8Km）離れた学校に通わなければならなかった。彼女の肌の色が黒いことが理由であった。白人用の学校と黒人用の学校が分離されていたからである。家の近所の白人用小学校への編入を求めたのがこの裁判であった。カンザス州トピカーの教育委員会は申請に拒否の回答をした。判決（1954年5月17日）は、公立学校における人種に基づく人種差別は違憲であるとした（バーダマン，2007）。人種差別への批判が社会的に広がりを見せ始めたのが1950年代も半ばになった頃である。

Nelsonが、人種ステレオタイプと偏見は、大きく減少したわけでも、なくなったわけでもなく、ただ表面化しにくくなっただけだ、と述べた背景には公民権運動の高揚と人種差別への厳しい目があった。こうして、「ステレオタイプ化することと偏見は“潜伏”してしまった」(Nelson,2006, p.115)。それは、偏見とステレオタイプ化は、もはや人の正常な部分ではなく、可能ならばつねに減少させるか、なくするかするしなければならない問題だと見なされるようになったからである。偏見は、その人が他のある人に対する否定的な見方を選択していることを意味し、その選択は道徳的な欠点 (moral defect) や精神的怠惰 (laziness) から起きていると受けとめられてしまうからだ (Nelson,2006, p.112)。



(2) 研究方法のいろいろ ステレオタイプや偏見を明らかにするために、様々な測定方法が考案されてきた。資料の収集方法には、質問紙法、実験法、民族誌的研究法、内容分析などがある。質問紙法は、調べたい内容（例えば、形容詞のリストを提示し、どの程度特定の集団に属する人にあてはまるか評定させる）を質問紙に整理し、回答者に評定を自己報告してもらう。実験法は、周辺条件を統制し、特定の条件が実験参加者の反応・行動に及ぼす影響を測定し、因果関係を明らかにしようとするものである。民族誌的研究法では、参与観察をしたり、行動を観察したり、聴き取りをしたりして、いろいろな質的データを収集する。行動が起こる日常場面、社会的背景、脈絡を重視する点も特徴である。

内容分析では、研究対象者の行動や反応そのものを分析するというより、日記や芸術作品、写真、絵など、その人が生み出したものの内容を分析することに中心がある。それぞれの測定法には長所と短所がある (Whitley and Kite, 2006)。長所と短所を考慮し、研究目的に合わせて技法を選択しなければならない (表1)。場合によっては、いくつかの技法を組み合わせなければならないときもある。

**ボーガス・パイプライン・テクニク** ステレオタイプや偏見を測定するために開発されたいろいろな技法は、それぞれに利点と限界をもつことがわかった。時代の変化と共に、「偏見」のある態度が公然とは表明されなくなってきたことが、偏見を測定する新たな方法を開発させる原動力になっている。「隠された態度」を測定するために工夫された代表的な技法、ボーガス・パイプライン・テクニク (The Bogus Pipeline Technique) を、Nelson (2006) によって概略理解しておこう。合衆国のヨーロッパ系の白人 (Caucasians) は、ここ何十年間かにわたってアフリカ

表1 偏見を測定する技法の長所と短所

| 技法   | 利点  | 限界   |
|--|---|--|
| 自己報告<br>(self report)                        | <ul style="list-style-type: none"> <li>・実施が容易である；質問紙は有効であり、実施するための訓練が簡単にできる。</li> <li>・複数の側面について質問することができる；態度の3成分すべて、情動・信念（認知）、行動の各成分について測定することができる。</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・意図的な要素が強く入る；社会的望ましきによる反応の歪みが生じやすい (SDRB)。</li> </ul>   |
| 実験参加者の行動のさりげない測定<br>(unobstrusive behavior)  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・自然な状況でさりげなく参加者に気づかれずに実施できる；フィールド研究で利用できる。</li> <li>・実験室での研究では、偏見の測定とは無関係だと思わせることで利用できる（控え室等）。</li> <li>・実験参加者が気づかないまま、偏見に関係した反応・行動を観察・測定することができる。（実験参加者は、インタビューを依頼される。インタビューする相手は、エイズ患者かガン患者のいずれかである。インタビューするために、イスを準備するようにいわれる。ガン患者よりエイズ患者の時に、イスを置き座る位置が離れていれば、エイズ患者に対する偏見が強い）。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・1つの場面で限られた数の行動しか測定できない；実験参加者が、研究目的に気づくと社会的望ましきの効果が発生しやすい。</li> </ul>   |
| 実験参加者の判断のさりげない測定<br>(unobstrusive judgement) | <ul style="list-style-type: none"> <li>・実験室で行う自然な判断作業がよい例（就職先への応募書類の審査・評価）；偏見の測定とは関係のないことだと思わせることができる）。</li> <li>・就職・採用（学生のピアカウンセラー）募集への応募者が書いた書類を実験参加者が読み、カウンセラーとして採用するのにどの応募者が適しているのかを判断して選考してもらう。書類には人種に関する情報がさりげなく含まれている。</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・限られた数の判断しか実施できない。参加者が研究の目的に気づくと、社会的望ましきの効果が生じやすい。</li> </ul>   |
| 生理的反応の測定<br>(physiological)                  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・反応は意識的なコントロールなしに生じる；比較的純粋な反応（肯定的・否定的）と情動の強さを測定できる。</li> <li>・心拍数、血圧、皮膚電気伝導、声のピッチ、顔面筋肉の微細な動き、まばたき、脳の特定領域の電氣的活動。</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・情動反応しか測定できない；反応の種類（怒り・恐れ、等）を区別できない。</li> <li>・必要な設備があるため通常実験室での実施に限定される；装置によっては高価で、操作するのに特殊な訓練が必要になる。</li> </ul> |
| 実験参加者の無意識の認知の測定<br>(implicit cognitive)      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・参加者は偏見が測定されていることを知らない。・関下で白人か黒人の顔写真を提示し、その後肯定的ないしは否定的な単語のいずれかを提示する。実験参加者が、黒人の顔をサブリミナル・プライミング刺激として見たとき、否定的単語を認知する反応時間が、肯定的単語を認知する反応時間より短ければ、その参加者は黒人に対する人種偏見を持っていることが示唆される。</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・必要な設備・装置があり、通常実験室での研究に限定される；手続きが複雑で、実験参加者が、手続きを間違えやすい。</li> </ul>  |

(Whitley and Kite, 2006より作成)

系アメリカ人に対して好意的な態度を示すことが報告されてきた。さらに、研究で実施された質問紙への回答でも白人は、人種偏見やアフリカ系アメリカ人についてのステレオタイプを示すことはほとんどない。Jones and Sigal (1971) は、白人の黒人に対する態度のこうした急激な変化はあり得ないないと考えた。とくに1960年代の人種間の関係が厳しかった時期には。白人の態度が大きく変化したわけではなく、黒人に対する否定的な人種態度を何のもなくあからさまに口にしなくなったのでは、と考えた。つまり、多くの人は、他の人種に対して社会的に認められる適切な態度を表明し、偏見は心の内にとどめるようになった。

Sigall and Page (1971) は、この「見せかけの態度」を明らかにする実験を考案した。それがボーガス・パイプライン・テクニックである。被験者は、ある装置をつけることによって自分の真の態度が明らかにされると思いこんでいた。被験者は、実験者が、実証しようとしている問題に対する態度を直接読み取ることができる、つまり直接つながっている情報ルート (pipe-line) を持っていると思いこまされていた。その装置は、ポリグラフの装置によく似ていて、ダイヤル、ライト、ブザー、筋電図記録 (検査) の電極 (EMG) がついていて、装置は被験者の腕につながっていた。

参加者の半分は、評定条件に割り当てられた。この条件では、尋ねられる問題に対して態度 (人種態度等) をハンドル装置を操作して表示する。残り半分の参加者は、EMG 条件に割り当てられた。この条件では、たずねられた問題に対して、参加者は、コンピュータにつながっているハンドルを回すことで自分の真の態度が、その装置によって自動的に測定されると教示された。評定条件と EMG 条件の参加者は、いずれもハンドルを回すと、ダイヤルを左右に動かすことができ、左回転はより否定的な態度を、右回転はより肯定的な態度を表示すると説明された。

評定条件の参加者は、ハンドルを回し、各質問項目に関する自分の態度を示す数値 (-3 から +3 の範囲) が表示されるよう「示針」を動かす。評定条件の参加者はさらに二つのグループ (条件) に分けられた。評定条件の半分の参加者に対しては、実験者は22個の特性リスト (例えば、迷信的、志のある、など) を読み上げ、参加者にそれぞれの特性は“アメリカ人”をどれだけよく表していると思うか、ハンドルを操作して示すよう教示した。残り半分の評定条件の参加者は、同様に、それぞれの特性は“黒人”をどれだけよく表していると思うか、ハンドルを操作して自分の態度を示すよう教示された。評定条件におけるこの研究の結果は、参加者 (すべて白人男性) は、白人と黒人両方に対し肯定的な態度を持つことを示した。

他方、EMG 条件では、参加者は、EMG 装置について説明を受け、研究の目的は装置の測定値が有効であることを確認することであるいわれた。実験者は、この装置は参加者の“見えない筋肉運動 (implicit muscle movement)”を検出することができ、参加者がハンドルを回そうとしている強さを実験者に表示することができる (たずねている質問項目に関する参加者の態度の強さと、態度が肯定的であるか否定的であるか、その方向を表示するということ) と教示された。参加者が装置の精度を確認するために、実験者は参加者にハンドルを握り、前に記入した5項目の質問紙の回答に集中するよう依頼した。実験者は質問を読みあげ、装置のスイッチを入れた。数秒間装置がうなったあと静かになり、「示針」が数値を指し示す。装置は参加者の態度評定値を知っている研究助手が隣の部屋でコントロールしている。4番目の質問項目で、実験者は参加者に自分の態度とは逆の態度を思い浮かべ、逆方向にハンドルを回して装置を“だましてみる”ことを勧めた。装置は“デタラメ (fooled)”ではなかった。「示針」は、参加者が前に質問紙に回答した評定値を指し示した。5番目の項目が終わったあと、実験者は参加者の回答した質問紙をテーブルから回収し、装置が記録した参加者の態度と比較し、装置の記録がいかに正確であるかを

参加者に見せた。その後、参加者に22個の質問項目を読み上げ、正直に態度を表示するよう要請した。評定条件と同じように、EMG条件の参加者の半分は、“アメリカ人”について、残りの半分の参加者は“黒人”について各特性がどれだけよくあてはまるかを評定させた。

EMG条件の参加者は、評定条件の参加者よりも、“アメリカ人”は肯定的な特性をもち、否定的な特性を持たないと評定する傾向が強かった。それに対して、評定条件の参加者の黒人に対する評定はかなり好意的であるが、EMG条件の参加者は、黒人は好ましくない特性を多くもち、好ましい特性はほとんど持たないと評定した。

これらの結果は、20世紀半ば以降の白人の黒人に対する偏見のある態度の劇的な減少は、表面的なものに過ぎないことを示唆している。多くの白人は、偏見に関する自己報告測度で示した平等主義者風の反応（態度）ほど、偏見が少ないわけではないのである。黒人に対する白人の否定的な態度は、劇的に減少したわけではなく、変わったのは白人が否定的な人種偏見をはっきり表明しはがなくなかったことである。EMG条件の参加者は、評定条件の参加者に比べ、黒人に対して否定的な態度を示した。それは、EMG条件の参加者は、装置が参加者自身の偽らざる態度を正確に検出すると思いこまされていたからである。もし、参加者が評定条件と同じように、表面的に偏見のない態度を装って回答したなら、嘘の反応をしていることを装置が感知し、実験者に暴露してしまうと思ったからである。「嘘つき」と見られる危険を冒すよりも、参加者は、偏見をもっていることを正直に出すことを選んだ、と解釈できる。こうした一連の手続きをさして、ボーガス・パイプライン・テクニックと呼んでいる。

**(2) 現代の差別・偏見の測定** 現在、偏見のある態度を表明することは、その人の社会的評価を著しく低下させ、信用を失墜させてしまう。すでに述べたように、現代の偏見は、社会的非難を避け、自己を防衛するために表面的には覆い隠されていることが多い。現代的偏見の有無を吟味するためには、顕在化させる工夫が欠かせない。私たち（坂西・土井，2006）が行った障害者、元ハンセン病患者に対する差別・偏見に関わる調査研究を例に、現代的偏見の検証について考えてみよう。

質問紙には、一般に印象評定や態度測定で回答の歪みを排除するために、肯定的質問項目と否定的質問項目をほぼ均等に配置すべきであろう。また、偏見には人や対象に対する否定的感情が重要な要素として含まれることが多いことから、偏見・差別の有無を明らかにする目的をもつ質問紙には否定的特性項目や表現も含めなければならない。ただし、このように述べたからといって、

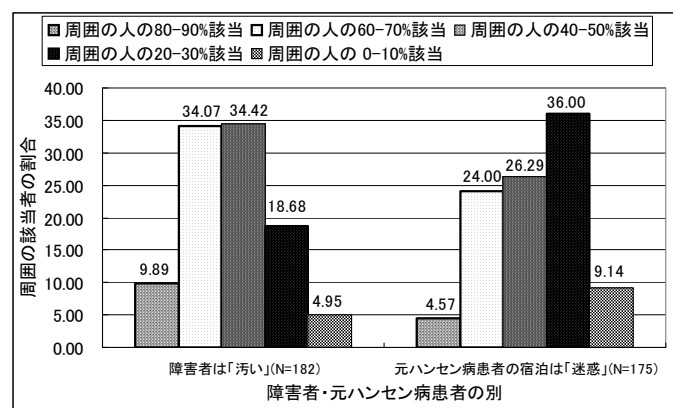


図1 「障害者」・「元ハンセン病患者」に対する周囲の人の態度の推測  
(坂西・土井，2006より)



筆者が、これらの否定的特性・特徴を、障害者がもつと考えるものではない。否定的特性・特徴を、障害者がもつものではないにもかかわらず、回答者が、主観的に「もつ」と回答するなら、差別や偏見の存在が示唆されることになる。例えば、元ハンセン病患者の宿泊に対する態度は、厳しく非難され、社会的制裁を受けた。したがって、偏見・差別行動の不当性と社会的非難を強く認識し、それらの排除に賛同しているならば、元ハンセン病患者の宿泊に対する回答者の態度は、倫理的、道義的正義に沿ってすべて肯定的になり、差別や偏見は存在しないはずである。つまり、否定的特性項目や質問項目が、回答者から例外なく否定されることで、差別・偏見の存在もまた否定されると考えられるのである。

では、障害者に対する差別・偏見はなくなったのであろうか。調査への回答結果は、差別・偏見の存在を示すものである。一般には、「障害者は汚い」と思っている人が少なくとも70%前後いる、と回答者は推測する。ほとんどの人は、「障害者は汚い」と思っている、と回答する人が10%以上いた。元ハンセン病患者に対し「迷惑だ」と感じる人の割合も少なくとも50%以上に達すると予想された(図1)。対照的に、回答者のほとんど(90%)は、元ハンセン病患者に対する自らの偏見と差別を否定している。Nelson(2006)の指摘と同様に、障害者に対する差別・偏見は未だに社会に広く存在することを示す結果である(図2)。

これらの質問項目の内容は、社会的に大きな問題を引き起こし、差別・偏見として糾弾されたものである。したがって、形式的、論理的に考えるなら、すべての回答者は、差別や・偏見を表明する質問項目に対しては「否定」的に回答するはずである。しかし、ここで注目したいことは、倫理的に大きな問題がある場合であっても、人々の心理には倫理に反する差別・偏見が深く浸透し、払拭されていないことがあり、このことを、私たちの研究の結果が示唆する点である。ハンセン病そのものが完治し、感染の心配がないにもかかわらず、元患者は政策的に隔離され、差別され続けてきた。元ハンセン病患者に対する差別と偏見の歴史が未だに理解されていない。偏見の誤りを理解させる情報が極端に少なく、教育を通じた対応がいかに欠如していたかを示す結果で、重い意味をもつ。差別・偏見が一旦生み出されると、根拠がないにもかかわらず、放置されることにより、人為的に存続させられ続け、人々の心の深部に無自覚のまま存在し続けることになるからである。朝日新聞の社説(2003年11月23日)は、このことを如実に伝えている。「ハンセン病は96年に隔離政策が廃止されるまで『怖い伝染病』とされてきた。治療法があり、短期で完治することを十分伝えてこなかったメディアの責任も重い。…偏見と差別をなくしていくには、地道な教育と啓発を重ねるしかない。…一人ひとりが心のなかに抱えているかも知れない偏見と向き合う。

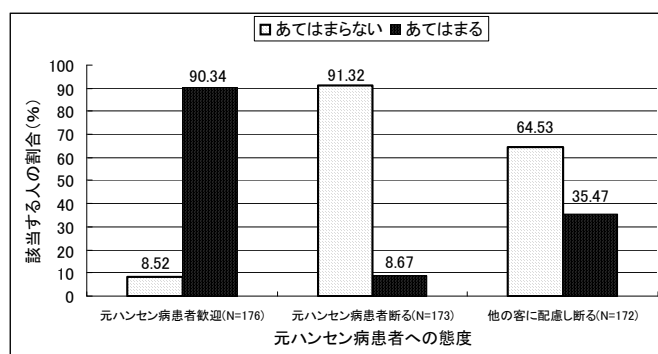


図2 「元ハンセン病患者」に対する回答者の態度と周囲の人の態度の推測 (坂西・土井, 2006より)

この悲しい事件をそのためのきっかけとしたい」。偏見・差別の根深さと、理想と現実のギャップの大きさを深刻に示すものである。差別・偏見を隠蔽するのではなく、問題を意識・自覚し、正しい情報を入手することによって問題の解決を目指すべきであろう。

### (3) 偏見の減少を吟味する研究—実験・調査研究で用いられる測度

子どもを対象に、偏見を減少させる実験で用いられる測度のほとんどは、態度の認知的成分、ないしは行動的成分のいずれかを測定するものが多い。差別を調べる測度には、一般に友人選択、遊び友だちの選択を用いるものが多い (Fishbein, 1996)。フランシス・アブード (1988) は、子どもの偏見を測定する方法として3種類を紹介している。Fishbeinとフランシス・アブードを参考に、ステレオタイプ・偏見を測定する尺度を、社会的距離尺度、好きな活動を選択させる尺度、PRAM II 尺度、ステレオタイプ評定尺度、人形法の順に列挙してみよう。

① **社会的距離尺度 (social distance scale)** 社会的距離尺度は、偏見の行動的成分を測定する1つの方法である。多段階の回答選択肢をもつ連続評定尺度を使用するテストである。社会的距離尺度の典型は、調査に参加する子どもにいろいろな情景・場面を用い、その情景・場面の中で自分自身を表す子どものいる場所を描かせる (描き込ませる) 方法である。教室で勉強している子どもを描いたシーンであったり、家で遊んでいる1コマであったりする。子どもたちは、どのくらいその人が好きか、どのくらいその人の近くに座りたいか、と聞かれる。例えば、子どもたちにいくつかの異なったエスニック集団の仲間の写真を60cmの「好意測定版」に沿って、好きな仲間は一段と近づけ、嫌いな者は遠ざけて置くよう求めた。紙の端に描かれた自分と他のエスニック集団成員の一人ひとりについて、どのくらい近くに座りたいか紙の上に印をつけるよう子どもに教示する。得点化は、描かれた (描き込まれた) 自分を表す子どもの絵と描かれている他の子どもとの距離を実際に測って行う。

② **好きな活動を選択させる尺度 (活動選好尺度: (activity preference scale)** 活動選考尺度は、偏見に関わる行動志向を測定しようとするものである。典型的な尺度は、同質の子ども、例えば、子どもは、人種や性の同じ子どもと一緒に作業している絵と、人種や性の異なる子どもと一緒に作業している絵 (同じ情景・場面を描いた絵) を提示され、どちらのグループに加わりたいか、あるいは友だちになりたいかを尋ねられる。子どもは、どちらかのグループを選択させられる。

③ **PRAM II 尺度 (就学前人種態度測度)** 態度を含めた偏見の認知的要素を測定する態度尺度の一つである。子どもは、各評価的形容詞が、黒人と白人の絵のどちらによくあてはまるか考え、よくあてはまる方を選択する。24の人種項目に12のジェンダー項目を織り交ぜて子どもに提示する。それぞれの項目の肯定的な特質あるいは否定的な特質を記述している。「ここに二人の女の子がいます。一人は醜い少女です。人びとはその子を見たくありません。醜い女の子は次のうちのどちらでしょう?」。「ここに二人の男の子がいます。一人は親切な男の子です。ある時彼は湖で溺れている子猫を見つけ助けあげました。その親切な男の子は次のうちどちらでしょう?」。子どもたちは黒人と白人の写真を見せられ、写真に最もよく合う記述を選ばなければならない。子どものもつ肯定的な態度あるいは否定的な態度の強さは、白人びいき、黒人びいき、あるいはその逆の選択の数の合計で決められる。

④ **ステレオタイプ評定尺度** ステレオタイプ評定尺度を含む偏見の認知的側面を測定する尺度である。一連の好ましくない特性 (sneaky, dirty, bad...) と好ましい特性 (brave, strong, friendly...) のリストを子どもに提示する。子どもは、ある特定のカテゴリーのどのくらいの割合の子どもが (すべての子ども、ほとんどの子ども、一部の子ども、2から3人の子ども、だれもい

ない)、その特性にあてはまるかを判断するよう要請される。ステレオタイプを測定するために、年少の子どもには絵を用いた絵本 (picture story) 法が用いられる。

⑤ **人形法** 子どもは黒人と白人の人形を (時には褐色の人形) を見せられ、次の質問に対する答えとして人形を選択するように求められる。「どの人形と遊びたい?」「良い人形はどれ?」「すてきな人形はどれ?」などと尋ねられるのである。子どもは、必ず1つの人形を選ばなければならない。

ステレオタイプと偏見の測定は、困難を伴い、それぞれの方法には一長一短があり、万能の測定はない。偏見を態度の一種と考えることにより、操作的に定義し、心理学の対象として設定できる意義は大きい。偏見を質的量的側面から測定することによって、その内容や特徴や性質を知る手がかりが得られる。さらに偏見を低減し、発生を予防する社会的条件を検討する糸口が得られるからである。とはいえ、偏見や差別を完全になくすることはきわめて難しい。宗教、主義主張、国の体制、政治的経済的仕組みの違い、等々、人によって考え方に大きな違いがある。偏見を生み出す原因には様々なものが指摘されているが、偏見の発生に大きく影響する要因の一つに人々のカテゴリー化があるとわれる。内集団と外集団の問題でもある。偏見や差別は減少しているのだろうか。日本においても「ヘイトスピーチ」や「ヘイトクライム」は、大きな社会問題となっている。排他的主張を具体的行動に表した場合には、差別や暴力に容易につながる危険性がある。移民の受け入れや原発事故からの避難者に対する中傷やいじめなどは、私たちの日常にある差別と偏見に深く関わるものである。

#### 引用文献

- アブード (フランシス・アブード) 2005 子どもと偏見 栗原孝・杉田明宏・小峰直史訳 ハーベスト社 (Aboud, F. 1988 Children and Prejudice. Blackwell Publishing)
- Albarracín, D., Johnson, B.T., and Zanna, M. P. (Eds.) 2005 THE HANDBOOK OF ATTITUDES. Mahwah, New Jersey: LAWRENCE ERLBAUM ASSOCIATES.
- Arbin, A. and Thyer, B.A. 2004 The Causes of Racial Prejudice: A Behavior-Analytic Perspective. In J.L.Chin (Eds.), The Psychology of Prejudice and Discrimination. Vol. 1, RACISM IN AMERICA. Westport, CT.: PRAEGER Publishers.
- 坂西友秀・土井容子 2006 障害者関連情報への接触と介護体験が対障害者態度に及ぼす影響 埼玉大学教育学部紀要 (教育科学), 55(1), 99-118.
- 坂西友秀 2006 「心理学研究」における民族の心理学的研究—植民地における教育と教育心理学—『日本における教育心理学の成立と展開を巡る歴史的研究』平成15年度～平成17年度 科学研究費補助金・基盤研究 (B) 研究成果報告書 研究代表・高砂美樹 Pp.35-79.
- バーダマン (ジェームス・M・バーダマン) 2007 黒人差別とアメリカ公民権運動—名もなき人々の戦いの記録— (水谷八也訳) 集英社
- Brewer, M.B. & Brown, R.J. 1998 Intergroup relations. In D.T. Gillbert, S.T.Fiske, & G. Lindzey (Eds.), Handbook of social psychology (4th ed., vol.2, pp.554-594). Boston:: McGraw-Hill.
- Brown, R. 1995 Prejudice. Its Social Psychology. Blackwell Publishers.
- Fishbein, H.D. 1996 PEER PREJUDICE AND DISCRIMINATION. Evolutionary, Cultural, and Developmental Dynamics. Colorado: Westview Press.
- Fishbein, H. D. 2002 PEER PREJUDICE AND DISCRIMINATION. The Origin of Prejudice. Second Edition. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associate Publishers.
- Forgas, J. P., and East, R. 2003 Affective Influences on Social Judgment and Decision. In J.P.



- Forgas, K. D. Williams, and W. von Hippel (eds) Social Judgments: Implicit and Explicit Processes.
- G. W. オルポート 1961 偏見の心理学 (上・下) (原谷達夫・野村昭共訳) 培風館
- Hamilton, D. L., & Trolie, T.K. 1986 Stereotypes and stereotyping: An overview of the cognitive approach. In J.F. Dovidio & S.L. Gaertner (Eds.), Prejudice, discrimination, and racism (pp.127-163). New York: Academic Press. (Cited from Nelson, T. 2006 THE PSYCHOLOGY of PREJUDICE SECOND EDITION, PEARSON EDUCATION)
- Hamilton, J. L., and von Hippel, W. 1996 Stereotypes. Annual Review of Psychology, 47, 237-271.
- ハッチンソン (アール・オファリ・ハッチンソン) 1998 ゆがんだ黒人イメージとアメリカ社会—ブラック・メール・イメージの形成と展開—明石書店 (Hutchinson, E.O. 1994 THE ASSASSINATION OF THE BLACK MALE IMAGE Middle Passage Press.)
- 飯田彬 1942 半島の子ら 第一出版協会
- Jones, E. E., & Sigall, H. 1971 The bogus pipeline: A new paradigm for measuring affect and attitude Psychological Bulletin, 76(5), 349-364.
- 梶山李之 2002 李朝残映—梶山李之朝鮮小説集 インパクト出版会
- 金英達 (伊地知紀子編) 2002 金英達著作集 I 創氏改名の法制度と歴史 明石書店
- 金英達 1997 創氏改名の研究 未来社
- 川村湊 2002 解説 (梶山李之 2002 李朝残映—梶山李之朝鮮小説集) インパクト出版会 312-363.
- Lippman, W. 1922 Public opinion. New York: Harcourt. (W. リップマン 1987 世論 上・下 (掛川トミ子訳) 岩波書店)
- Locke, A. 1953 SOME OUTSTANDING AMERICAN NEGROES. IN E.V. McLOUGHLIN, L.H.D. (Ed.) The Book of Knowledge. THE CHILDREN'S ENCYCLOPEDIA, Vol.12, pp.4427-4433.
- 宮田節子・金英達・梁泰昊 1992 創氏改名 明石書店
- Nelson, T. D. 2006 The psychology of Prejudice. Second Edition. Boston, M. A.: Allyn and Bacon.
- パーク (リンダ・スー・パーク) 2006 木槿の咲く庭—スンヒとテヨルの物語 (柳田由紀子訳) 新潮社
- 佐々木毅・鶴見俊輔・冨永健一・中村政則・正村公宏・村上陽一郎編 1991 戦後史大事典 三省堂
- Sigall, H. and Page, R. 1971 Current Stereotypes: A Little fading, a little taking. Journal of Personality and Social Psychology, 18, 247-255.
- Slocum, F. and Lee, Y. 2004 Racism, Racial Stereotypes, and American Politics. In J.L.Chin (Eds.), The Psychology of Prejudice and Discrimination. Vol.1, RACISM IN AMERICA. Westport, CT.: PRAEGER Publishers.
- Whitley, B. E. Jr. and Kite, M. E. 2006 The Psychology of Prejudice and Discrimination. Belmont, CA: Thomson Wadsworth.
- Worchel, S., Cooper, J., Goethals, G.R., and Olson, J. M. 2000 Social Psychology Belmont: Wadsworth/Thomson Learning.
- Zimmerman, P. G., Johnson, R. L., and Werber, A. L. 2006 Psychology: Core Concepts Allyn and Bacon (U.S.A)

(2017年3月31日提出)

(2017年4月17日受理)

# **Studies on discrimination, prejudice and attitudes toward race and ethnicity (II)**

Research on racial / ethnic discrimination, prejudice and attitudes in Japan

**Tomohide BANZAI**

Saitama University, Faculty of Education, Psychology and Educational Practice Course

## **Abstract**

This discussion is the latter part of a series of studies. In this paper, we consider historically the problem of racial / ethnic discrimination / prejudice in Japan, related to modern Japan's entry into Asia and invasion. In 1931, Japan started actively entering Asia and invading, starting with "Manchuria Incident". Actually the colonial expansion policy was implemented long before that, and in 1895 Taiwan was taken over as Japanese territory. In 1910, Korea consolidation was carried out, and Japanese system of education system was laid to fuse "Nisshin". "Creation renamed" is one of them, forcing the Korean people to rename the Korean name to the Japanese name. Using this "remodeling" colonial policy as an example, we examined the historical realities of Japanese ethnic discrimination. Currently, "hate speech" and "hate crime" are becoming a social problem, but a viewpoint to capture as a problem of ethnic discrimination · prejudice deeply related to the Japanese historical process is necessary.

In the first chapter, historical and psychological considerations were made according to the following contents. 1 Race and Ethnic" discrimination and colonies of Japan, (1) Korea annexation and "Surname Creation and Renam, (2) "Surname Creation and Renam" done by "the children of the peninsula ", (3) " assimilation into the "Japanese house system"(IE) and "Surname Creation and Renam", (4) "Surname Creation and Renam" and the identity of the Korean people, (5) Language domination by Japan and the identity of the Korean people. In chapter 2, we discussed the stereotype and prejudice related to race / ethnicity from the viewpoint of social psychology using the concept of "attitude". Prejudice is one of "attitudes" which is a constitutive concept in psychology. It is an important subject of social psychology to define manipulationally the attitude, approaches to realistic prejudice problems, to elucidate the actual situation and to clarify ways to solve and reduce it. In the discussion, the following items were considered. 2 Race / ethnic stereotype and prejudice, (1) Origin and characteristics of stereotypes, (2) definition of stereotype, (3) prejudice and its characteristics, (4) stereotype and prejudice. In Chapter 3, we focused on the measurement of ethnic stereotypes and prejudice. We organized and examined concrete research methods according to the following contents. (1) Difficult to measure stereotypes and prejudice, (2) Various research methods, ① Bogus pipeline technique, ② Measurement of discrimination and prejudice of the present day, ③ Research to examine the way of reducing prejudice; Measure used in Experiments and surveys: (a) social distance scale, (b) activity preference measure, (c) PRAM II scale, (d) stereotype rating scale, (e) Doll method (How to make a doll (puppet) choice).

**Key words:** coloies, attitude, stereotypes, prejudice, Bogus pipeline technique